

マルチな才能を

発揮した

佐々木長淳



佐々木長淳肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

幕 末期に西洋式の鉄砲や大砲の製造に携わり、明治維新後は、繊維産業の近代化に貢献するなど、終生にわたり多彩な才能を発揮した福井藩士、佐々木長淳。

天保元（1830）年、長淳は、福井藩士、佐々木長恭の子として生まれます。幼い頃から絵が得意であつたといわれており、幼馴染みであつた橋本左内の死後に肖像画も書いています。一方で、優れた剣士としての一面も有していました。福井藩主、松平春嶽の側近である中根雪江から「勇邁の気性あり」と称されるほど、その腕前は相当なものでし

た。様々な分野で才能を開花させた長淳、その万能ぶりがわかるエピソードが残っています。

嘉永7（1854）年、25歳の長淳はペリーの黒船が再来航した際に、藩から偵察を命じられ密かに黒船に乗り込むことに成功します。長淳は英語が喋れないため手まねでアメリカ人士官にお願いし、船内や大砲を得意の絵で書き写しました。これだけにとどまらず、長淳は差していた長刀に興味をもった将校らの求めに応じ剣技を披露します。長刀を縦横に振り回し、縦切り、横なぎ、

突きなど実践さながらの技を繰り出し、さらに厚い紙をたくさん重ね寸断して見せました。その様子を見た士官たちは舌をまいたといわれています。長淳は優秀な技術者としての顔だけではなく、雪江が評したように勇敢な剣士としての顔も持ち合わせていたのです。

西洋の先進的な技術に触れた長淳は、その後、西洋式の鉄砲や大砲、火薬の製造責任者となり技術改良や大量生産に取り組んだほか、日本人で初めてアメリカに渡ったジョン万次郎に助言を受け、西洋式帆船「一番丸」を建造するなど数々の功績を残しました。

また、軍事関連だけではなく更に幅広い分野に才能を発揮します。文久2（1862）年に、春嶽は日本ですべて初めて自転車（ビラスビイデ・ビコウシ）に乗ったとされていますが、この自転車を組み立てたのも実は長淳なのです。

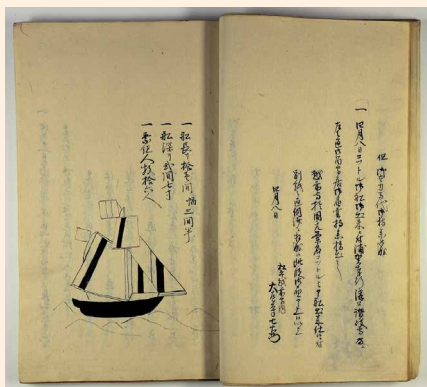
明治維新後は、長淳は養蚕や紡績関係の官僚として新政府に参加し、養蚕や紡績の研究調査と指導を行い、蚕の病虫害研究に力を注いだほか、日本人技術者が初めて手掛けた近代的工場である「新町屑糸紡績所」の建設に携わるなど、繊維産業の近代化に尽力しました。

大正5（1916）年、長淳は87歳でその生涯を終えますが、長淳の志は息子の佐々木忠次郎に受け継がれます。忠次郎は近代養蚕学の先駆者として、父と同じように近代繊維産業の発展に大きな功績を残しているのです。

関連史料・ゆかりの地

佐々木長淳が製作した洋式帆船「一番丸」

長淳が製作した洋式帆船「一番丸」に関する史料（119 越前世譜 茂昭様御代）
(松平文庫(福井県立図書館保管))



安政6（1859）年、佐々木長淳は洋式帆船「一番丸」を完成・進水させました。16人乗りで全長20メートルの一番丸は同年4月に試験航海のため三國湊を出帆し、同年6月に江戸湾に停泊しました。